

1960年代学生運動参加者の運動観と政治観

——歴史化される社会運動と社会運動論——

京都大学 小杉亮子

本報告の目的は、1960年代学生運動を事例に、2011年の東日本大震災以後の反原発・脱原発運動や2015年の安保法制反対運動など、質・量の両面で新たな展開を見せているように思われる日本の社会運動を前にして、運動の「新しさ」を指摘するさいに比較・対比の対象とされる過去の社会運動を研究する現在の意味を再考することにある。

2010年代の社会運動をめぐる言説のなかでは、とりわけ1960～1970年代ごろの社会運動を念頭に、“かつては暴力的だったが、いまは非暴力” “かつては組織動員だったが、いまは個人の主体的参加からなっている” “かつては紋切り型の左翼的言葉遣いだったが、いまは自分の言葉で語っている” と、過去の運動と対比しつつ、現在の運動を肯定的に評価する傾向が見られる。一例としては、「六〇年安保、七〇年安保の闘いは、政党と労働組合によって組織された闘いであった。学生運動も全学連と多数のセクトによって組織された闘いであった。しかし、今日の闘いはまったく異なっている。一人ひとりの個人が自主的に連帯し、多様な市民が協同で主体となる闘いが展開されている」（佐藤2015: 157）といった表現が挙げられる（ほかに石田2015a, 2005b; 五野井2012など）。もちろん、現在との対比のなかで過去の運動が一律に否定されるわけではなく、“ベトナムに平和を！ 市民連合”といった一部の運動は、現在の運動とのあいだに連続性が見られるという点において肯定的にとらえられている（高橋・SEALDs 2015: 126）。

こうした過去との対比をとおして示される現在の社会運動への評価は、日本の社会運動研究のどのような特徴から生じているのか。とくに、ある運動に“画期性”や“新しさ”を見出すのは、戦後社会運動論で繰り返されてきた議論でもある。過去との対比と新しさの発見という論じかたでは見逃されてしまう、現在の社会運動の歴史性や特色はないのか。さらに運動現場では、組織や参加者、戦略・戦術の面において、過去の社会運動と現在の社会運動とが単純に断絶しているとは考えにくい。現在の社会運動を構成する歴史性をいかに発見し、評価することができるのか。本報告では、社会運動をめぐる言説のなかで2011年以降の社会運動の先進性を指摘するさいにたびたび比較対象とされてきた1960年代学生運動を検討することとおして、このような問いについて考察したい。具体的には、1960年代学生運動参加者の聞き取りデータを参加者の運動観・政治観に着目して分析し、制度政治志向とサブ政治志向の葛藤が参加者のなかにあったことを指摘する。そのうえで、この葛藤が社会運動論と現代の社会運動にたいしてもつ含意を示す。

文献

- 五野井郁夫, 2012, 『「テモ」とは何か——変貌する直接民主主義』NHK出版。
- 石田雄, 2015, 「SEALDsを通してみた社会運動の今日的特質（前編）——92歳市民社会学者の試論」（<http://www.news-pj.net/news/34128> 2016年6月20日取得）。
- 佐藤学, 2015, 「社会変革の新たな胎動と知識人の役割——『安全保障関連法案に反対する学者の会』が示唆するもの」『現代思想』vol.43-14: 15-159。
- 高橋源一郎・SEALDs, 2015, 『民主主義ってなんだ？』河出書房新社。